

カンボジア国の特別支援教育報告①

－ 視覚障害を中心に －

間々田和彦*

カンボジアについて

カンボジアは他の開発国と大きく異なる背景がある。

アンコールワット遺跡などの観光と農業が産業の中心のカンボジアは、国民のほとんどが小乗仏教（上座部仏教）を信仰しており、国民性はきわめて穏やかである。しかしながら、1970年代後半の大規模な内戦により、全国土は物的にも人的にも徹底的に荒廃した。そのため、平均年収は814米ドル（デイリーカンボジア 2011 / 10 / 21）という最貧国の一つとなっている。さらに内戦中には小中高校教員までも含んだ知識層を中心に多くの国民の命と、それまでの書物などの知的財産が失われ、教育体制は完全に崩壊した。そのため、カンボジアでは国のリーダーとなる知識層の数が圧倒的に少ないのが現状である。

1 カンボジアの教育事情

1. 教育課程：カンボジアの教育課程は、基本的に日本と同じ、6、3、3制である。小学校中学校は義務教育である。公立小学校は朝、昼の各4時間、2部制授業が主である。教科書は教育省（Ministry of Education youth and Sport 以下、教育省）から無償配布されている。
2. 教員養成：教員養成は基本的に各州（全23州）に1校ある教員養成学校、プノンベンにある高等師範学校と講習によりおこなわれている。教員養成学校は小学校教員と中学校教員の養成をおこない、高等師範学校は高等学校および教員養成学校の教員養成をおこなう。小学校教員は、中学校卒業後に2年間の教員養成学校を卒業すると小学校教員免許が取得できる。そのほか、講習（8週間）により臨時免許が取得できる。中学校教員は高校卒業後、2年間の教員養成学校を卒業すると中学校教員免許が取得できる。プノンベンにある高等師範学校は入学資格が全国に60校ある4年制大学のいずれかを卒業後の修業1年の課程である。なお、以前は教員の給与がとても低く、カンボジアの

平均月収を下回っていたと言われるが、聞き取り調査の結果では現在は平均月収に近い水準であった。しかしながら、特に都市部の給与生活者としては必ずしも十分な待遇とはいえず、その中で質の高い教員の確保が急務となっている。

3. 教育支援

- ① ハード面：小学校中学校の数は現在も絶対的に不足している。日本をはじめ様々な国や国際的なNGO等がカンボジアに小学校を建設している。教科書は教育省が作成した1種類が無償配布されている。とはいえ見学した小学校では、使い回している教科書も多く、どの程度に無償配布されているかは不明である。どの教科においても教材教具の数は少なく、理科を含めてもつばら教科書を読み進む座学が主である。
- ② ソフト面：日本からはJICA公益財団法人CIESFや海外青年協力隊が教員養成校での教員養成、現職教員研修を軸に教育支援活動を行っている。これまで、広島大学山口大学横浜国立大学等も個別に教育支援や調査研究をおこなっている。
- ③ 就学率：小学校への就学率は95%を超えている。その一方で、小学校卒業率は70%台にとどまっているといわれる（上田他、2006等）。そのため、小学校を修了するまでの基金を奨学金として集めているところもあり、その基金を集めることも教育支援の大きな柱となっている。一方、支援するNPO相互の連絡が十分とは言えず、効率的な支援が求められている。

2 カンボジアの障害児教育

1. カンボジアの障害児者概要

カンボジアの障害児者に関する2010年に刊行された統計（2008年調査）では、障害種（視る：seeing、話す：speech、聴く：hearing、移動：movement、精神：mental）、地域、性、雇用などが詳細に記載されて

*筑波大学特別支援教育研究センター

いる。これらは、日本での視覚障害、聴覚障害、肢体不自由、知的障害に相当している。これによればカンボジア国内の障害者は192,538名となっている。この統計によると、視覚障害児者は障害児者の29.97%であり、障害児の未就学率が14.09%であるとされている（上田2006）。比較的、その数が把握されていると考えられる視覚障害聴覚障害児の数においても、訪問した学校などでの聞き取り調査の結果から十分に信頼できるとはいえない。

視覚障害聴覚障害以外での障害種をみると、肢体不自由に相当する「移動」の児童数が比較的、把握されていると考えられる。カンボジアには、内戦時等に使用された地雷などで障害者となった肢体不自由者への施設があり、地雷などがほぼ撤去された現在、その施設でポリオ、脳性麻痺などによる肢体不自由児への教育がおこなわれているためである。自閉症、知的障害等の児童への指導は、ごく限られた施設でおこなわれているのが現状である。

法律では障害児はインテグレーション教育を受けることになっている。しかしながら見学した学校では多くの視覚聴覚障害児は下学年の普通校で学んでいること（fig.1）や、一週間をとおして授業に参加していないことがあるなど、その実態は日本におけるものとは大きく異なっている。



fig.1 普通小学校に学ぶ視覚障害中学生

2. 障害児に対する教育カリキュラム

カンボジアでは2009年に障害児への教育プログラムが開始された。そこでは養成課程と現職教育のカリキュラムが示されている。カリキュラムは教育省のDr. Maya KALYANPUR (Inclusive Education Advisor)

氏が中心となって作成した。このカリキュラムに基づくパイロットスクールが2011年に開校するなど、障害児教育に関する大きな動きがある。これらに関しては次稿において詳細に述べる。

3. 視覚障害 Krousar Thmey Pnom Penh 校の実態を中心に

- ① 普通教育：カンボジア国内で視覚障害教育／聴覚障害教育をおこなっている学校は、Krousar Thmey が創設した4校（Pnom Penh 校、Kampong Cham 校、Battambang 校、Siem Reap 校）のみである。各校とも視覚障害部門は、日本での自立活動に相当する「障害補償」や学習補習が主である。
- ② 視覚障害教育部門：小学部クラスと中学部クラスを参観し、子どもたちが点字の教科書を使用して学ぶ様子を見学した。全員に教科書が配布されていること、ノートは新聞紙（学校からは「リサイクル用紙」との説明）（fig.2）であった。担当者からは学習上の支援として、使用している点字盤が壊れやすいこと、盲人用算盤が使いにくいことの説明があった。



fig.2 メモをとる小学生

- ③ 就学：Krousar Thmey School 各校への就学は、各校が障害児が居住する地域の区長（町内会長と市区町村長の中間的存在）をとおした募集である。悉皆調査にはなっていないため、視覚障害児の各校への就学年齢が就学年齢とは一致していないケースが多い。
- ④ 就労：第一次調査（面接）では、大学へ進学した学生、既卒の学生のともにマッサージ業へは否定的な感情を有していた。全員が、Krousar Thmey School 各校の教員もしくはコーディネーターを希望していた。これはカンボジア国の大学進学率が低いこと、3年前

に初めての大学卒業生（2009年）があったことから、現状の認識が十分でないことや進学することへの特権意識がある可能性がある。一方、教員はマッサージ業を彼らの一つの選択として重要視しており、第三次調査では Siem Reap 校に 2011 年マッサージ課程を創設したことが判明した。この課程には日本からも指導員が配置予定である。

⑤ Krousar Thmey Phnom Penh 校（視覚障害／聴覚障害）の概要（2010年当時）

Phnom Penh 校は、教育部門とセンターが各々視覚・聴覚別に 2 部門、点字出版部門、事務部門、寄宿舎から構成されている。Phnom Penh 校は全土 4 校の中心校である。卒業の支援を主におこなうセンターもこの学校に設置されているほか、4 校の児童生徒が使用する点字教科書も全てここで出版している。一貫して 12 学年として扱われる小中高校課程卒業後も、センターでは他校卒業生を含め、寄宿舎での生活や寄宿舎から大学への通学補償をおこなっている。なお、弱視生に対する拡大教科書の提供はない。

在籍児童生徒 131 名（視覚障害：83 名、聴覚障害 48 名）。聴覚障害児の寄宿生は無く全員が通学している。視覚障害児は 83 名中 48 名が寄宿舎で生活

している。1 学年から 12 学年まで各 1 クラスに 1 年生の補習クラス 1 クラスを加えた計 13 クラスが設置され、その中でも 1、2 学年の在籍は他の学年と比べて数的に多く 27 名が在籍している。

教職員は 34 名。その中で視覚障害者が 4 名、聴覚障害者が 2 名が教師として勤務している。

⑥ Krousar Thmey は、フランスに本部を持つ国際的な NGO で、英国、スイスに支部がある。Krousar Thmey は障害児教育ばかりでなく、伝統的な織物や工芸品の制作、音楽家養成を行う職業教育の学校を運営するほか、何らかの理由で家庭がなく就学できない児童生徒へのサポートとして児童福祉施設も運営している。

3 視覚障害大学生への面接調査

1. 大学生のプロフィール

2010 年に面接した大学生のプロフィールは table.1 に示す。全員がいわゆる就学年齢に就学していないことが大きな特徴である。この中で点字を学んだ時期についての質問項目があるが、この時期と就学時期が一致しており、就学年齢を過ぎても小学校の第 1 学年から入学していることを示している。センター内で白杖歩行の訓練を受けているが、大学までの通学手段に白杖歩行が無いのは、熱帯であるカンボジア国の気候、市民の移動手段が

table.1 面談した 5 人のプロフィール（2010 年）

	性別	学年	住居	通学手段	失明年	点字指導開始年	出身校	将来の希望
A	男	3	自宅	バイク／タクシー	0 歳	10 歳	Phnom Penh	進学
B	男	3	Phnom Penh 校寄宿舎	センターの車両	0 歳	8 歳	Phnom Penh	進学教職（盲学校）
C	女	3	Phnom Penh 校寄宿舎	センターの車両	0 歳	15 歳	BattamBang	進学教職（盲学校）
D	男	3	兄弟と居住	バイク／タクシー	4 歳	10 歳	Phnom Penh	進学
(E)	男	卒	自宅	バイク／タクシー	0 歳	12 歳	Phnom Penh	進学



fig.3 視覚障害大学生

オートバイに人を乗せる台車を接続したモロー（一般的には Tuk Tuk と称す）や、オートバイの荷台に乗車するモトバイク（バイクタクシー）が主であること、整備されていない歩道等が原因と考えられる。

第 2 次調査終了後、大学をとおして IC レコーダーを彼らに貸与したが、第 3 次調査ではその使用への感謝が全員より述べられた。(fig.3)

2. 進路希望

第一次調査では、進学または Krousar Thmey School

各校の教師あるいはコーディネーターを希望していた。
普通校での教師やマッサージ業の希望は無かった。

本報告は、2009年から2012年にわたるカンボジア王国（以下、カンボジア）での視覚障害を中心とした現地調査、カンボジアへの教育支援をおこなっているNPO等の支援団体および個人への聞き取り調査、電話メールでの情報収集、公刊された文献を元にしたものである。

本報告をまとめるにあたり、王立プノンペン大学在学視覚障害学生担当・言語学科長 Samreth Sothea 教授、2012年王立プノンペン大学内に開設された特別支援教育研究センターアシスタントの Van Vy 王立プノンペン大学大学院生の多大な協力を得たことに感謝する。

資料

調査日程調査先一覧

1. プレ調査 2009年12月
 - ① Krousar Thmey School Phnom Penh 校の見学。
 - ② 王立プノンペン大学視覚障害学生（卒業生1名）への面接。
 - ③ Krousar Thmey School Phnom Penh 校コーディネーターとの懇談。
2. 1次調査 2010年12月
 - ① 王立プノンペン大学在学視覚障害学生（5名）への面接。
 - ② Krousar Thmey School Phnom Penh 校の見学とコーディネーターとの面接調査。
 - ③ シムリアップ市で放課後の小学校を利用して開催している音楽教室、日本語学校の見学。
3. 2次調査 2011年5月
 - ① 王立プノンペン大学在学視覚障害学生の希望する支援を中心とした面接（継続）。
 - ② Krousar Thmey School Phnom Penh 校の見学とコーディネーターとの面接調査（継続）。
 - ③ プレスベン肢体不自由施設見学とコーディネーターとの懇談。
 - ④ CAPSEA が主催するコンポンチャム州の普通小学校における識字教育の現状見学（2校）と、奨学金対象児童自宅の訪問。
4. 3次調査 2012年1月
 - ① Krousar Thmey School の各地域校（Kampong Cham 校、Battambang 校、Siem Reap 校）見学
 - ② Krousar Thmey 各校在学生の通学するバツタン

ボン市の普通小学校、シムリアップ市の教員養成学校附属小学校、プノンペン市の普通高校と、各校コーディネーター等との面接

- ③ Krousar Thmey School Siem Reap 校在学高校生との面接。
- ④ 王立プノンペン大学長、副学長、同大学教育学研究科長（次期教育省高等局次官）、教育省インテグレーション教育担当コーディネーターとの面談。

2 電話による調査先

- ① CAPSEA (Cultural Aide Project for South-East Asia) : CAPSEA は在日カンボジア人ペン氏が1992年に創設した団体。当初は女子への職業教育訓練をおこなっていたが、現在はカンボジアの子どもたちへの識字教育を主に活動している。
- ② SVA (社団法人・シャンティ国際ボランティア会) : SVA は1981年、インドシナ難民の大量発生を契機にカンボジア難民キャンプで開始した支援活動が始まりの団体。図書館事業、学校建設事業、スラム教育文化支援事業、伝統文化支援事業を行っている。

参考文献

- 阿部弘和他「カンボジアの学校教育と教員養成に関する現地調査」報告書(2008)
- 上田広美他編著「カンボジアを知るための60章」(2006)明石書店
- 間々田和彦「カンボジア王国における視覚障がい者への教育支援」(2011)視覚障害 No.281 pp.1 - 14
- 四本健二「カンボジアにおける障害と開発」(2009)小林昌之編『開発途上国の障害者と法：法的権利の確立の観点から』調査報告書 アジア経済研究所 所収
- カンボジア国では国が発行する出版物にはすべて「KINGDOM OF CAMBODIA Nation Religion King」とあるが、次に挙げる文献では割愛している。
- Ministry of Education Youth and Sport Policy on Education for Children with Disabilities (2008/3)
- Education for Children with Disabilities (ESWD) Master Plan 2009 to 2011 (2009)
- National Institute of Statistics, Ministry of Planning (2010) General Population Census of Cambodia 2008 Analysis of the Census Results Report 5 DISABILITY

参考HP

- 公益財団法人
CIESF <http://www.ciesf.org/index.html>
- 公益社団法人シャンティ国際ボランティア会
<http://sva.or.jp/>
- CAPSEA (Cultural Aide Project for South-East Asia)
<http://blog.oricon.co.jp/setharin/>
- 平均月収に関する記事 デイリーカンボジア 2011/10/21
<http://angkor.blog13.fc2.com/blog-entry-1533.html>